**ロシア・東欧学会共通論題**

**企画委員会としての提案骨子（仮）**

２０１３年３月９日に開催された理事会において、１０月５日、６日に津田塾大学で開催されるロシア・東欧学会の共通論題テーマは、理事会での審議の末、「多極化世界におけるロシア・東欧地域の人と生活」（仮）となった。

これはこの２，３年間、１９８９年の体制転換２０年、１９９１年のソ連崩壊２０年、さらに、ポスト共産時代のリーダーとリーダーシップなど、政治・経済のハードな側面に焦点を当ててきたことに鑑み、政治経済の変容を踏まえつつも、文化、社会、生活面をも視野に入れた総合的検討を行う必要があろうという議論の結果として、提示されたものである。

それを踏まえ、企画委員は、各分野を考慮し、以下の5名が選出された。（敬称略）

　羽場久美子（委員長、青山学院大学・国際政治）、杉浦史和（委員、帝京大学・国際経済）、ヨコタ村上孝之（委員、大阪大学・ロシア文学）、吉岡潤（委員、津田塾大学、大会開催校・ポーランド政治史）、兵頭慎治（委員、防衛研究所・ロシアの安全保障、事務局）。

現段階では、方向性として、例えば次の３点ほどが提示できよう。第１は、グローバル化による国境の解放、移民・越境と、境界線をめぐる対立、紛争、共存の課題、第２は、グローバル化とネットワークの拡大による、文化・社会の多様化、アイデンティティの変容と共生の課題、第３は、気候変動や、災害対策、エネルギーの枯渇や共同の試みを、どのように市民生活の安定・発展・繁栄と結びつける形で、再構築するか、という課題である。

いずれも、政治・経済とも密接に絡みつつ、それだけでは解決の糸口が見えない、主権・帰属意識、ナショナリズムと移民をめぐる排除と包摂の論理、そこから現れてくる、文化文学の多元的な変容と新たな思想的再構築、等が必要な課題となろう。これ以外の論点も含めて、この間、ロシア・東欧研究で、地道な成果を上げてきている研究に焦点を当てるものを発掘する努力を行う。

以上を踏まえ、共通論題の報告者２名は、政治経済安全保障から１名、社会文化文学から１名、討論者は、報告者に入らなかった分野から１名または２名、さらにその後のパネルディスカッションとして、政治、経済、社会・文化、文学から、各１名ずつ、４名程度を選び、体制転換後４半世紀になろうとする、ロシア・東欧の社会思想生活について、議論を深める。

それにより、この間４，５年の共通論題の流れを止揚し発展させるような、思想的深さと多元的視野を持った共通論題を提供するものとしたい。